

社 会 科

I 教科構造検討の視点

—— 地理、歴史の教材内容のかかわり
を中心として ——

都 築 亨 加 藤 佳 孝 織 田 長 繁

1. 意図と問題の所在

前年の紀要で「社会科における教科構造」の問題をなぜとりあげたかということ、そして、二、三の領域内容については何が問題であるかをまとめてみた。

昭和47年度より中学校の指導要領が改訂され、48年度からは高校のそれかわるという展望の中で、教材内容の位置づけを含む、教科構造——この場合あえて教科構造という用語を使用するのは、中学校の場合は「分野」という表現で、高校の場合は「科目」というよび方でなされている社会科内の各領域を、中学校・高校の両方について「社会科」というまとまりをもった教科の構成の問題として考えねばならないと意識するからである。——の問題をとり上げてみたい。

2. 中学校の「地理、歴史」的分野

中学校の社会科が、いわゆる統一された形での「社会科」ではなくて、「地理」「歴史」「政経社」の各分野に分化し、実質的に社会科が解体したのは昭和33年の指導要領からであるが、47年度指導要領では、地理・歴史をそれぞれ1～2年通して学習させてもよいということになって、やや「社会科」としての教科のまとまりを意識できる形になった。この点は指導要領の一つの前進的側面であると評価できるが、しかし同時に、このことの中に多くの問題点を内包している。

数年来、本校でこの問題を「教科構造」の問題として取りあげてきた中で、1年は「日本人の生活舞台と歴史」2年は「世界の中での日本」3年は「現代社会と人間」というように、各学年ごとに学習主題を設定し、その視点で内容の構成を考えはじめたのである。これは改訂指導要領の方向を先取りした形にもなっているが、その当初のわれわれの立場で考えるときにもまた改訂指導要領の問題として考えるときにも、1年の「日本」2年の「世界の中での日本」とともに地理的内容と歴史的内容のブレンドの仕方に問題がのこる。

われわれが考えた領域構成のタイプというのは次の3つである。

〔A〕日本地理と歴史の前半（近代以前の日本史中

心）を1年で並行学習し、2年では世界地理と近代史（世界史と近代以後の日本）とを並行学習する。

〔B〕1年で「郷土の学習」—「日本地誌」を先習し後半に日本史（近代以前）2年では世界と近代の歴史を先習したのちに、世界地理を学習する。

〔C〕1年で日本の地理・歴史をまとめた形で学習し2年で世界地理・世界史をまとめ、かつ日本とのつながりをつよく出した形で内容構成を工夫する。

—昨年、昨年とわれわれがねらっていたのは〔A〕の構成であった。しかし歴史的分野を1年と2年とどのように配分するか、前年の紀要でもふれたが、高校の日本史・世界史を統一的につかもうとする反面で中学の歴史は、日本史・世界史に分けた方がよいのではないか。そうした観点から日本史を中心とした1年の分野と、世界史的流れの中での日本近代史を2年の分野にという構想を入れて〔C〕の構成を考えるようになった。別表に示すのはそのプランであるが。

① ただ単純に地理と歴史を学習させるのではなく空間的把握と時間的認識とをかみあわせ、その関連から更にひろく、社会的経済的文化的面にまで目を開かせるべきではないか。

② 歴史の発展のプログラムの中にある程度地理的内容をあわせて、地理の内容構成をくみかえることを考える必要はないか。

③ 日本の課題を、そして歴史的条件と現代的地域の問題を明確に位置づけるべきではないか。

地理的内容と歴史的内容とも完全に併行して関連づけることは不可能であろうが、社会科の学習のはじめの部分にあたって郷土の自然と歴史とをとりあげ、それを「郷土の学習」として地理のみならず、郷土史の内容をおりこむこと、そしてそれによってもすれば身近な関心領域からはなれがちな歴史の学習に一つのスジを通すことが配慮の第一である。

第二には奈良・平安という古代国家の成立—その地域の基盤は近畿である—にあわせて「近畿地方」の学習を併行させ、鎌倉時代という東国の開発期の歴史をみる時に「関東地方」の地理の学習を併行させるという形で、「地歴併行」の原則を通そうとした。

教科構造検討の視点

月	週	地理分野の主要学習項目	歴史分野の主要学習項目
4	1	I 私達の生活する郷土と日本	(14)
	2	〔1〕私達の生活環境 郷土の地理的環境と歴史的発展, 郷土の産業と生活, 都市と生活, 地形図の読図と作業, 野外学習の準備	
	3	〔2〕国土の自然と国民 国土の位置と自然, 民族の歴史的形成, 人口の分布と産業構造	
5	4	II 産業と人口の集中する太平洋ベルト地帯	日本の始まり
	5		
6	6	〔2〕近畿地方 (8) 西日本の中心商工業都市大阪 阪神工業地帯とその拡大 大阪市周辺の都市と農村 北部・南部山地の産業と生活 近畿圏整備計画	III 古代国家の成立
	7		
7	8	〔3〕関東地方 (8) 首都圏の中心東京 京浜工業地帯の発展と問題点 近郊農業と台地の畑作 北関東の鉱工業 首都圏整備計画	IV 封建社会の形成
	9		
9	10	〔4〕瀬戸内地方 (4) 発展する工業地域, 製塩業の変化 集約的な農業	V 封建社会の確立
	11		
10	12	〔5〕北九州地方 (3) 北九州工業地帯, おとろえる炭田 筑紫平野の農業	VI 封建社会の移り変わり
	13		
11	14	III 開発の期待される北陸・東北・北海道	
	15		
12	16	〔7〕南四国・山陰地方 (4) 高知平野の野菜栽培, 砂丘の農業 中国山地の牧牛, さかんな沖合遠洋漁業	
	17		
1	18	〔9〕東北地方 (6) 稲作と果樹 三陸の漁業 豊富な鉱産資源 発展する工業地域	
	19		
2	20		
	21		
3	22	V, VII 世界と結びつく日本	(6)
	23		

地理だけについていえば、九州から学習するのも、北海道から学習するのも、それほど特別な意味があるわけではないが、歴史の方から見れば、各時代の主たる舞台を同じ時に学習することはきわめて意味のあることではないだろうか。このことがもたらす生徒の学習面への効果については、本年度の授業をすすめる中で検討したいと考えている。

第三に学習の終りの時期に全体としての日本のもつ問題と世界への展望をまとめ、その中で開国後世界の仲間入りを約束させられた、近代初頭の「歴史的位置づけ」を考慮に入れたこと。同時に「世界」の学習への導入の役割も果させたい。

3. 高校地理・歴史の教科構造検討へのひとつのアプローチ

(1) 地理

地理はその本質へのアプローチが、地誌と、系統地理の2つの手法があることは確かである。しかし、そのことから新指導要領において、地理が地理A(系統地理)地理B(地誌)の2つに区分されねばならないという理由は出てこないのではないか。地理A・Bと区分することは、手法の2面性のそれぞれの特徴を生かす方策としては妥当なのかもしれないが、それは方法的側面の主張に重点がおいた考え方であり、学習者である高校生の側に立つ基準ではない。高校地理は、地誌でも系統地理でもどちらでもよいのであるという柔軟な考えこそ、高校生に地理として何を学習させるか、あるいは学習させねばならないかを考える重要な視点になるのではないか。

また、地理が扱わねばならない事実、現象が、著しい社会の発展に伴ない増加している中で、地理が何単

位で学習されねばならないかということについては様々な基準や制約がある。この点についてはカリキュラム全体の中で考え、位置づけられるべきである。また一つの枠の中で重要な留意点があるとすれば、それは既成の概念にとらわれない自由な教材の取捨選択、あるいは教材の精選であるだろうし、学習方法や学習形態の改善、教育機器の導入などの効率の良い授業の追求ということであろう。

本校では以上の2点を地理の本質へのアプローチを考える場合の視点としてとらえ、教科構造への検討を加えてきている。以下には、一応、改訂指導要領への移行措置としての部分も加味しながら、昭和47年度実施の学習計画をあげ、検討への1ステップとしたい。

学習計画の特色やねらいとしては、

①4単位の地理を3単位地理と1単位地理に区分した。これは、改訂指導要領では3単位で履習せざるを得ない事態を予想してのものである。

②3単位地理は、改訂指導要領の地理B(地誌)に近いものであるが、系統地理と地誌をかみあわせた地理ができないかという視点を持つ。

③3単位地理の地誌的学習は、範例学習を念頭においたグループ学習を中心におく。これはかぎられた時間内で学習がなされねばならないからである。

④1単位地理は、多少問題を含むが、3単位地理の補充という意味をもたせ、系統地理的学習を中心とする。

以上の学習計画の実施をとうして、地理の教科構造の検討を加えて行きたいし、地誌的学習の中で範例学習など新しい方法もとり入れ、改訂指導要領の地理B(地誌)のあり方にも考案を広げたい。

A. 地理学習計画(3単位用)

B. (1単位用)

月	週	主要学習項目(配当時間)	学習項目のねらいと留意点	主要学習項目
4月	1	§1 地表と人類 (13)	○地表の人類が、人種や民族のちがいがから種々の集団を形成していることに気づかせ、さらに人口の偏在と急増の現状を認識させる。 ○人間の生活舞台である自然について、地形気候などが人間とどのようなかわりあいを持つかを考えさせ、それらがどのようなメカニズムを持ち地表に分布するかを理解させる。	1 世界の農牧業
	2	〔1〕地表の人類とその諸集団 1.世界の人口とその分布 2.人類の諸集団		◇農牧業の形態と農牧業地域
	3	〔2〕世界の自然環境 1.陸地と海洋 2.地形環境 3.気候環境		◇原始的農牧業とプランテーション
	4			◇アジアの農業
5月	5	〔3〕居住圏の拡大 (7)	○古代からの地図の発達をとうして、人類の地理的視野の拡大やエクメネの拡大を考えさせる。また、居住圏の中での人間という観点から、集落の地理特に都市を学習する	◇ヨーロッパの農牧業
	6	1.地図の発達史にみる居住圏の拡大 2.集落の地理		

教科構造検討の視点

6月	7	(4)資源と産業の分布	(10)○人類の生産活動が自然条件とのかかわりあ	◇新文陸の農牧業 ◇集団制の農牧業
	8	1.経済立地論		
	9	2.世界の農牧業		
	10	3.世界の林業と水産業		
	10	4.主要資源の分布と生産 5.世界の工発と工業地域		
7月	11	(5)地域 (Region) と地域区分	(3)○地域とは何にかを考えさせ、種々の地域区分を行なってみる。	2 世界の林業と水産業
	12	1.地域の概念2.地域区分 § 2 世界の諸地域		
9月	13	(1)日本 (2)アジア諸国	○世界の諸地域の地誌的学習は、地域のとりあげ方、また地域のとらえ方などにおいて様々な方法があるが、地域の設定は§ 1の〔5〕と関連させながら、左のA・Bの平凡なとりあげ方をする。それは、地域区分を考えさせるのが主要な目的ではないからである。	3 鉱業 ◇動力資源の分布と生産 (特に石油資源の生産と需給を中心として石油資本やOPECなどをとりあげる) ◇鉱産資源の分布と生産
	14	(2)先進諸国		
	15	1.西ヨーロッパ諸国		
	16	(3)乾燥圏諸国		
	16	2.アングロアメリカ諸国		
10月	17	(4)アフリカ諸国 (サハラ以南)	○次のようなグループ共同研究・発表の学習形態を提案する。	4 工業 ◇工業の発達と立地 ◇世界の主要工業地域 (1)ヨーロッパ (2)合衆国 (3)ソビエト (4)アジア (5)日本
	18			
	19	3.オセアニア (オーストラリア・ニュージーランド)		
	20	(5)西ヨーロッパ諸国		
	20	(2)開発途上の国		
11月	21	1.アジア諸国	○以上のグループ学習の提案は1学期末に行ない、夏季休業などを利用し研究するよう指導する。	5 国土の開発と保全
	22			
	23	(6)北アメリカ諸国		
	24	2.乾燥圏諸国		
	25	3.アフリカ諸国 (サハラ以南)		
12月	26	(7)南アメリカ諸国	○各地域のとりあげ方は、地域全体を地誌的に扱ってもよいし、地域内をさらに細分し	
	27			
	28	(8)ソビエト		
	29	4.南アメリカ諸国		
	30	(9)東ヨーロッパ諸国		
1月	30	1.ソビエト連邦	○各地域のとりあげ方は、地域全体を地誌的に扱ってもよいし、地域内をさらに細分し	
	3	(4)社会主義諸国		

近 現 代 史 の 学 習

時期	週	学 習 内 容	主 題 的 学 習 の 中 心	備 考
4月	1	VII世界史の一体化への動き (6) (1)チムール帝国とオスマン帝国 (2)明の中国統一と対外関係 君生独裁制の完成、北虜南倭	○オスマン帝国を中心に、チムール、明、ヨーロッパとの関連、その間が統一されつゝあった状況を理解させる。	XIIの部分の学習を前学年のまとめとして、前に(2年の終章に)位置づけるのも一案である。 ◇主題を3つにしよる。
	2	(3)ヨーロッパの近代めばえと新航路開拓の動機 (4)アメリカ大陸とヨーロッパ (5)中国、日本へのヨーロッパ人の渡来 切支丹伝来	○都市のおこり、ルネッサンスの基盤、地理的発見の動機などを、近代のめばえとしてまとめる。 ○いわゆる新大陸発見を、ヨーロッパ中心でなく又中国、日本とヨーロッパとの交渉の発端を相互的なものとして。	
	3	VIIIキリスト教世界の近代と絶対主義 (1)宗教改革と近代社会 (11) (2)絶対主義国家と重商主義 オランダ独立、エリザベス時代、ドイツ、フランスの宗教戦争、東欧絶対主義、植民地抗争の展開	○ルターと農民戦争、カルヴィンと資本主義の精神などを中心に近代社会初期の中心問題として ○絶対主義の成立期における宗教戦争を中心にヨーロッパでのキリスト教の位置づけを。	
	4	(3)ルネサンスと近代ヨーロッパ文化 IXヨーロッパ市民社会の成立と発展 (30)	○ルネサンス文化を各国の絶対主義的状况の中に位置づけ、18世紀の宮廷文化につなげる。 ○絶対主義支配の中から対処しつゝ成長してきた市民階級の状況を、イギリスのもつ特殊性をふまえながらふれる。	
5月	5	(1)イギリス議会政治の発展 スチュワート専制、ピューリタン革命、王政復古と名誉革命、立憲政治の発展	○市民階級の成長に産業革命をつづける。 ○独立革命にいたる植民地の課題、対処を中心に ○市民革命の典型として、各階級の対処関係を中心としながら、社会的、国際的視点も加えて革命の進展とその挫折過程を。	西洋を中心に学習をすすめる場合にはⅩを36時間ぐらいい。
	6	(2)産業革命と資本主義の確立 (3)アメリカの独立革命 憲法制定 (4)フランス革命とナポレオン	○革命後の反動としてのウィーン体制とその矛盾 その中から7月革命が生起した前後の情勢を。	
	7	アンシャンレジーム、革命の勃発 ジャコバン独裁、ナポレオン帝政とその没落	○1848年より1860年ごろにいたるヨーロッパの自由主義、ナショナリズムの発達を各国の相互の関連のもとにとりあげる。(7, 8, 9, 10, 11, 12)	
6月	8	(5)ウィーン体制下のヨーロッパ (6)七月王政とイギリス自由主義の発展 労働運動と社会主義	○東方問題、クリミア戦争も、トルコ、エジプトを含む列国の利害関係の交錯した場としてまとめる。	(7)~(12)はグループ別の学習をさせてまとめる。
	9	(7)二月革命とヨーロッパ (8)アメリカの発展と南北戦争 (9)ドイツ、イタリアの統一	○清の支配体制、その社会文化を康康、乾隆期の盛期を中心としてまとめる。 ○戦国の統一の過程をふまえ、検地、刀狩から幕藩体制、身分制社会の確立するまでを。 ○社会的、経済的諸条件の中で、幕政が転換し、三大改革を生み、窮乏化してゆく状況を。 ○農民、町人、下士層に蓄積されたエネルギーとそのイデオロギーを。	
7月	10	(10)パリ、コンミュンと第三共和政 (11)東方問題、ロシアの近代化 (12)ヴィクトリア時代のイギリス (13)市民文化の成熟	○清の支配体制、その社会文化を康康、乾隆期の盛期を中心としてまとめる。 ○戦国の統一の過程をふまえ、検地、刀狩から幕藩体制、身分制社会の確立するまでを。 ○社会的、経済的諸条件の中で、幕政が転換し、三大改革を生み、窮乏化してゆく状況を。 ○農民、町人、下士層に蓄積されたエネルギーとそのイデオロギーを。	世界史を中心に学習する場合にはⅩを36、Ⅺを14時間位(Xの(1)は4~5に増)に、日本史中心に学習する場合にはⅩを20時間Xを30時間ぐらいい。
	11	(14)信長、秀吉による天下統一 (15)幕藩体制の確立と鎖国 (16)封建社会の成熟と動揺 社会経済の発展、元禄文化、享保改革、田沼時代、寛政の改革、農村の窮乏、化政文化、国学と洋学 天保改革	○ロシア、イギリス、フランスのアジア進出の過程と、とくに英のインド支配の進行を。	
	12	Ⅺ列強のアジア進出と日本の近代(24) (1)ヨーロッパの東方進出とインド帝国	○アヘン戦争、太平天国の動揺の中での中国の対	
8月	13	(2)列強の侵略と中国の動揺、太平天		
9月	14			
	15			
10月	16			
	17			
11月	18			
	19			

月	31	(10)オセアニア諸国	2.東ヨーロッパ諸国	てその1つをとりあげてもよいことにする	◇国土開発の意義 ◇世界の国土開発 ◇日本の国土開発（特に工業開発と公害問題か考えさせる）
	32				
2月	33	§ 3 世界の結合		(6)○世界の交通網や貿易をとうして世界の国々の結びつきを考えさせ、国家群の形成や国際情勢などの学習で、世界史、日本史の学習への動機づけとなるよう指導する。	
	34	(1)交通・貿易による結びつき (2)国家群の形成			

(2) 歴史

歴史については、前年の紀要で要約したような統一的历史の内容を考案中であるが、

- ①内容を精選すること。
- ②日本史については世界的展望を
- ③世界史については、日本の現実に立脚した歴史を
- ④中学では世界史と日本史とをむしろ分けた形で、高校については、統一的观点を重くみたい。
- ⑤2～3年で、日本史4、世界史4、あわせて8単位のワクの中で統一的历史を構想する。

⑥にもかかわらず、統一的历史を学習させるとき部分的には、視点をどこかにおいて、「課題」的な取扱いをする必要もあるということ、それは時間的制約の面からも要請される条件である。

以上のいくつかの条件をみたましながら、限られた制約の中で、次のような「歴史」の教科構造の構案をすすめてみた。

- (1) 2年生（の4単位分）で、日本史と世界史とをまとめた形での近代以前の「統一的历史」を考える。
- (2) 3年（の4単位分）では、「日本の現実に立脚した世界史」と「世界的視野に立つ日本史」とを選択学習させる。

2年の「歴史」（4単位分）の内容とその素案については、45年度の紀要でその概要を示したし、その構想についてもそれほど変更しなければならない必要性を生じてはいない。

紀要前集において「近現代史においては、同時代の動きをすべての地域のあらゆる動きと関連させてとらえる……のでなければ世界史は成立しない」とのべ、その故に構成上より問題があると感じていた古代、中世史の教材構造を主たる研究対象においてきたのであるが、問題が少ないと考え、かつ自明のものとして統一的世界史の可能性を期待していた近現代史の分野について「世界史」として構成しようと検討を加えてみると、なかなか簡単なことではすまないと感じるのである。

たしかに現代に入って現実的に世界史は成立するわけだし、日本史といえども世界史的背景ぬきにして眺

観することはできない。「日本の立場に立って世界史を」再編成する必要は依然としてあるし、「世界史の中の日本」史を考えねばならぬことはたしかである。しかし、その二つの要求を統一して、近代以前の構成を考案したのと同じねらいで、「統一的世界史」の構想を具体化してみると、多くの点で問題を感じざるを得ないのである。

今ここに報告というよりは、提案をしたいのは、本当の意味での世界史の構成がまだできていない現在において——私は、現在高校で使用されている教科書のほとんどは東洋史・西洋史の妥協的くみ合わせ版であり、世界史の名に値するものはほとんど存在しないと考えている——試行錯誤によってでも世界史のモデルを創出しなければならないということである。そしてその意味で、「日本の立場に立つ世界史」も「世界史の中の日本史」もその存在価値をみとめられねばならないということである。

- ①膨大化する教育内容（歴史の）をどこかで整理する必要がある、その整理に一つの視点が要求される。
- ②したがって範例学習的な意味を含めて「日本の近代社会の成立史」（世界史をふまえた）がその一つのタイプであり、「資本主義社会の発展」（日本からみた）も一つのモデルとなり得る。
- ③近代の部分で日本史・世界史をあわせて4単位分しか充当できないという制約の中で、どちらかに重点をおいた「歴史」を構案する必要がある。

以下に示すのは何れにも偏らないで「世界史」を構想した場合であるが、上述した理由によって、今一度構成の主軸をどちらかにずらし、「日本」に比重をかけるか、「世界」に比重をかけるか、はっきりすべき必要性を感じている。

11月	20	国, 洋務運動 (3)明治維新と日本の近代化 開国, 尊王攘夷, 明治維新, 廃藩置県, 殖産興業政策, 地租改正, 文明開化	応としてこの段階の洋務運動を。 ○日本の近代化の過程を, その前進的側面とその限界との双方を提示する。
	21	(4)自由民権運動, 立憲制の成立	○自由民権の伸展とその挫折, 明治憲法体制の成立過程, その時期における国権要求と条約改正との関係。
12月	22	(5)条約改正と日清戦争, 資本主義の発達	○帝国主義とは何か, その各国での帝国主義的路線の出現と分割地, ボーア戦争を中心に。
	23	XII帝国主義とアジア (10)	
1月	24	(1)帝国主義の成立とアフリカ, 太平洋の分割 (2)中国の対応と義和団の乱	○変法運動の意味と戊戌の政変→北清事変を。 ○国際関係の中での日露戦争, 戦後社会問題を。
	25	(3)日露戦争と戦後の社会, 文化 (4)辛亥革命とアジア, ナショナリズム	○孫文の三民主義, 青年トルコ党, 国民会議派の結成。
2月	26	XIII第一次世界大戦と戦後の世界 (12)	○大戦前のモロッコ, バルカン問題と第二インターの戦争阻止の動き, サライエボ事件より拡大へ。
	27	(1)大戦前の国際関係と大戦の勃発 (2)ロシア革命 (3)大戦と日本, 米騒動, シベリア出兵 (4)大正デモクラシーと市民文化	○ロシア革命を大戦の流れの中に位置づける。 ○21ヶ条をめぐる問題と大戦中の好景気。
3月	28	(5)ヴェルサイユ体制と戦後の各国 ヴェルサイユ条約, 国際連盟, 軍縮条約, 米の繁栄と英仏の状況, ワイマール体制とその崩壊, 中国, インド, 日本	○第一次護憲から原内閣, 1921~22年の民衆運動の高まり。 ○国際協調の風潮とそれに背をむけるような列国の状況, 英仏伊独の財政問題, 賠償問題。 ○五・四運動以後北伐の開始までの中国とインドのスワデシ・スワラジ, 中近東民族の運動を。
	29	XIVファシズムの成立と第二次世界大戦 (14)	
4月	30	(1)不景気の到来とその打開の道 (2)満州事変とファシズム	○金融恐慌, 大恐慌と日本の外交転換, ニュー・デールにみられる米の対応, イタリア, ドイツへの恐慌の影響。ソ連の発展, 等々各国の対応を。
	31	(3)独伊のファシズム支配と枢軸成立 (4)日華事変と戦時体制, 大政翼賛会 (5)第二次大戦, 太平洋戦争の勃発	○第二次大戦にいたる過程を, 一方では日本の立場を, 又一方ではヨーロッパを中心として。
5月	32	XV戦後の世界と日本 (8)	
	33	(1)国際連合の成立と戦後処理 (2)日本の占領, 民主化政策, 憲法制定 (3)冷戦の開始, 二つの世界, 朝鮮動乱 (4)日本の国際社会への復帰	戦後の世界を国連の成立を中心として 戦後の日本の諸問題, 日本国憲法の制定 中華人民共和国の成立から朝鮮戦争を中心に サンフランシスコ講和条約の締結, 日ソ交渉, 国連加盟 ジュネーブ会議, バンドン会議を中心として
6月	34	(5)アジア, アフリカのナショナリズム (6)再軍備, 安保体制と経済成長 (7)現在の国際関係と日本	防衛問題, 安保問題と1960年代の日本 現代の諸問題を国際関係外交の推移と, 一方で国内政治, 経済社会的動向, さらには現代文化の問題として。

4. 教科構造検討の視点

この論稿では中学校の2年の分野にまで手をのばすことができていないし、高校の歴史も、2年の領域（近代以前）については、尚検討を加えねばならない面が多々ある。

したがって今回報告したのはごく限られた面についてだけであるが、地理、歴史といういわば内容教科の典型とされそうな領域について、尚問題点をまとめておきたい。

(1) 中学・高校の教材内容の重複する面を斜消し、どちらかに重点をおくことは、内容整理の上では是非考慮に入りたい点である。しかし、本校のように中高両方を併存する学校を別とすれば、全体的確認（たとえば指導要領による）が得られなければ、一方だけで都合のよい教材内容を恣意的に構成することはできない。

(2) したがって、中学校の場合は、地理と歴史との関連という点を教科構造を考えるさいの第一の条件に出してみたが、観念的には時間の軸と空間の軸を一ヶ所で結ぶことができるにしても、常に関連を保って学習させることができるか、さらにはまたその意味があるか、疑がわしいところである。学習の始めの部分と、終章に全体的な展望と問題を位置づけ、歴史のある時期に地理の学習を併置するに止まったかもしれない。

しかし、それでも生徒の「限られたその時代の地理的条件」の理解は深まったと感じとられるし、その土地の歴史的背景についてもただ単に「地理的理解」をこえた質の高い理解をもつことができるであろう。

(3) 中学で「日本の歴史」と世界を中心とした歴史分野とを分けて学習するとすれば、高校では「日本世界をまとめた歴史学習」とするか、或いはその何れかに重点をおいた範例的学習をするかのいずれかであろう日本史、世界史を高校で重ねてくり返す必要は全くないからである。

今までの検討の視点は前者にあったわけであるが、とくに時間的制約を強く意識するとき、後者（範例的取扱い）に検討を加えるべき必要性をつよく感ずるのである。範例学習をこうした形で採用するのは範例学習の本旨ではないかもしれないが、現実的、現代的要請の上に近現代史の姿を考えると、世界史、日本史の既成の枠にとらわれず、歴史を貫く論理が要求されねばならないということである。それは主題とよんでもよいし或いは範例と考えてもよいであろう。

前に表示したプランはあえて偏よりを意識しないままに掲げたものである。このプランを土台にして、主題（あるいは範例学習のテーマ）を中軸としてとした新しい歴史の構造を更に追求してゆきたいと考えている。